

■ maria sama ga miteru fan book

可憐な  
あんなに  
可愛くない



私の  
あんなに  
可愛くない

〜新刊がこんなに薄いわけがない〜

『私の妹がこんなに可愛いわけがない』

「実写映画『マリア様がみてる』観た？」

私は思わず聞き耳を立ててしまった。クラスメイトの誰かがしている映画の話題に。

そのつもりは無かったけれど、知っている作品だったからだ。

私は教室の机にうつ伏せに突っ伏したまま寝ているフリをしつつ会話を聞き続けた。

「祐巳さまは天使よ、あれは間違いなく天使だわ」

「お顔がコロコロとお変わりになるの素敵よね。百面相って言ってたっけ？ 表情豊かなのは慈愛に溢れている証拠よね」

「様子さまも凜として素敵だったわ。ご令嬢という表現がピッタリ」

「緊張なさってたのか震え気味な声で『タイ

が曲がついてよ』と、お声を掛けられるシーンに心打たれたわ。私だったら失神し

ちやう」

「薔薇さま方の台詞の言い回しも素敵だった。年端もいかない少女達が表現できていたと思うの」

「私には棒読みにしかな聞こえなかったけれど、熟練の映画監督なら狙ってやった線はあるわね」

「外でダンスの練習するシーン、美しかったよね」

「バレエシューズを使わずに砂利の上で踊れるなんて、様子さまと祐巳さまだからこそ成せる業よ、真似できない」

「柏木優は要らないわよね、男なんて不要だわ」

「何をおっしゃってるの？ 祐巳さまに

どこことなく似た愛嬌あるお顔で、私はアリだと思っただわね」

会話をしているのは二人のようだ。それにしても観るだけの人間というもの

は

どうしてこう好き勝手放題に言えるのだろうか。撮影期間実質十日。寒冷地の突貫ロケで、春先なのにストーブで身を寄せ合いながら、学業をお休みまでしての泊まり込みの撮影。スクリーンの向こうには苦勞と緊張が詰まっている。それを声が震えているのだの、台詞が棒読みだの、自分達と同年代の少女達にハリウッドの女優と同じことができると思ってるのだろうか。女優がいかに大変であるか知っている身としては、いささか不愉快である。「あなた達、何を言ってるの？ 実写なんてイメージ破壊もいいところだわ。でも私は『マリア様のたしなみ』のために、映画館を三箇所ハシゴしたわよ」

話に割り込んできた三人目は、内容に触れずに作品批判ときたもんだ。何様のつもりなのだろうか。

「伊藤美紀お姉さまと植田佳奈嬢の声があつてこそ、マリア様がみてるというものだわ」

「あら、未来穂香さんが演じる祐巳さまの可愛さや、波瑠さんの祥子さまそっくりな麗しさを観た上での発言かしら？」

「もちろん観た上での発言ですよ？ 実写なんてやっぱり失敗だったと確信できたわ」

「まあ。原作のイメージに少しでも近づけようと頑張った少女達の演技が伝わってないなんて、残念ですこと」

「『マリア様のたしなみ』は素晴らしかったわ。飲食はお静かにと注意するシーンで出てきた麵食堂のラーメンの美味しそうなこと、マリア象を持ち込まないと洒落が効いた注意。これらを美紀さまと佳奈さまのお声でやるなんて最高だった。はあ」

「聞いてないし」

バン！ 激しく机を叩く音に、その場にいた全員が注目した。

「瞳子さん……?」

両手が痺れてジンジンするけれど、これ以上居たら、掴みかかって頬のひとつでも叩きかねなかったので、私は教室を出て行くことにした。

すぐに後を追いかけてくる足音が聞こえた。私は振り返らなかった。足音の主は追いつくと私の右側に歩調を合わせて歩いた。

「瞳子……」

「あなたは、あの方々の話に加わらなくていいのかしら?」

「私、映画観てないから」

「そう」

「次は出られるといいね」

「なにが?」

「映画。私たち」

右側にいる市松人形のような黒髪のおかっぱ少女は、私の右手をギュッと握って手を繋いできた。その手は温かくて柔らかくて気持ち

ちがよかった。

「だけど、瞳子の髪型が似合う子って

そう簡単には見つからないかもね」

「乃梨子さんの髪型は多そうだから、簡単に見つかりそうね」

「実際、多いと思う」

「こんなに温かい手をした子が、そう簡単に見つかったもたまらないけど」

「そう?」

無邪気に笑う乃梨子を見てると、教室での会話がどうでもよくなってきた。人の評価なんてものは、それぞれ。好きに言わせておけばいいのだ。人の意見を聞いたからって、自分の好きな人が変わってしまうわけではない。聞き流せばよかったのだ。それだけだったんだ。

「あ、瞳子」

「ごきげんよう、祐巳さま」

声を掛けられたのは私なのに、乃梨子が先に挨拶を返してしまった。

「何かあったの？ 手なんか繋いじゃって」

「この手はお返ししますね」

乃梨子は瞳子と繋いでた手を、そのまま祐巳さまの左手に握らせた。

「ちよっ!？」

心の準備も何もしてなかったの、私は驚きの声をあげてしまった。

「これ、何かのおまじない？」

祐巳さまの方は驚いた様子もなく自然だった。瞳子の手をしっかりと握ったまま。

「はい、行ってらっしゃい」

乃梨子は、パタパタと右手を振って、二人を見送った。祐巳さまと手を繋いだまま校内を歩くという変な流れのまま、しばらく一緒に宛もなく歩いた。

「お、お姉さま」

「ん？」

姉妹とはいえ、手を繋ぐのは何だか恥ずかしかった。これが演劇とかなら全然平気なのに。

「今日の瞳子、ちよっと変だよ？」

「え」

「だって、私の妹がこんなに可愛いわけがないもの」

「ええっ!？」

「なんてね」

「お姉さまったら!」

可愛いのは、お姉さまの方ですよ。そう思ったけど口にはしなかった。

だって、悔しかったから。

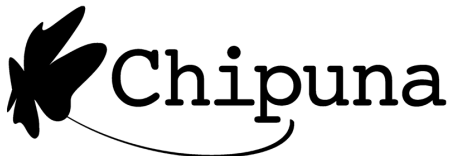
# ISSUES #69

## 2010 AUTUMN

orz

あくづけ

Chipuna 第69回配本  
「私の妹がこんなに可愛いわけがない」  
発行日 2010年10月24日  
著者 見月七蓮  
発行



Web <http://chipuna.com>  
Twitter @32ki